

白山ふるさと文学賞

第三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

夕暮れの音楽室

松任中学校二年

宮田 みやた

茉歩 まほ

いつもどおり鍵の開いたままの窓にはおが緩んだ。この小学校のセキュリティはどうなっているのだろう。

窓わくに足をかけて音楽室の床におり立つ。夕方だというのに元氣な太陽が見たくなくてカーテンを引いた。

相も変わらず小さい、グランドピアノとは名ばかりの物の前に座った。人差し指で鍵盤を押すと澄んだ音が響いた。ああ、またレッスンをサボってしまったな、とぼんやり考える。人から指図されてピアノを弾くのは嫌いだ。ましてや自分より才能の無い人にだなんて。

勝手に指の練習曲を弾きだす自分の手を眺める。白くて何一つ傷のない綺麗な手。この手が事故か何かでぐちゃぐちゃになれば、私はこのいまましい楽器から永久に離れられるのだろうか。

いや。自分の問いを自分で否定する。私はピアノから逃げられない。持って生まれた才能を憎みながらそれに一番すがっているのはお前じゃないか。たとえ事故にあったとして、私は手と引き換えに足でも差し出すだろう。

夕陽のあたたかさを首筋に感じて、我にかえった私は窓を振りむいた。カーテンが開いたのだろうか。

「あ。」

どちらからともなくそう言って、窓からのぞいていたその子は苦笑いした。整った顔と二つ結びの髪には見覚えがなかったが、着ているのは私たちの中学校の制服だった。

「どうして。」

また二人同時に言って、その子は気まずそうに「先、言って。」と呟いた。

「どうしてここに。」

「神崎さんこそ。ここ小学校でしょ。」

「まあ、ちょっと。なんで私のこと知ってるの。」

「一年の時伴奏者賞とってたじゃん、学年みんな知ってると思うよ。」

「あれ、そうだっけ。まああんなの取れてあたりまえだけどねえ。みんな

な下手だったし。」

そう言った私にその子は一瞬驚いたような表情になって、すぐにまた笑った。

「言うね、神崎さん。」

私は顔が歪みそうになるのを必死に抑えた。この子が去年弾いていたのをなんとなく思い出して言ったのに。嫌そうな顔をしていなくなってくれると思っただけなのに。

「あんたも弾いてなかった？」

「あは、クラスで一人しかいなかったからさ。へたっぴなんだけどね。」軽く肩をすくめる様子が、そのほりの深い顔もあいまって外国人のようだった。よしよ、と窓わくに腰をのせる。

「ねえ、何か弾いてくれない。」

「…あんたに言われなくてもいつつも弾いてんだけどね。」

「まあまあそう言わず。」生意気な奴だ。私はピアノに向き直って鍵盤に再び指を置いた。

「モーツアルト、ピアノソナタへ長調、K280。」

題名を呟くだけで動き出す自分の指を眺める。呟かなくてもいいがそうした方がなんとなく好きだ。

背中にあの子の視線を感じる。五分近い曲だから、そのうちにいなくなっただけ。後ろから拍手の音が聞こえた。

手を持ち上げる。後ろから拍手の音が聞こえた。

「リスト、ラ・カンパネラ。」

意図的にその音を無視してまた指を動かす。

「ポピュラーな曲ばかり。」

退屈そうにひとりごちる。いらいらして手に力がこもって、指がもつれた。

思わず舌打ちをする。乱暴に両手指で鍵盤を叩くと、いやになるほど汚い音が響いた。

「落ちついて、神崎さん。ごめん。」

「謝るくらいなら最初から言わないで。」

いすから立ち上がって机の上に乗る。

「そんなに偉そうなこと言えるんなら、あんたも何か弾けばいいじゃん。」

あごをしゃくると彼女は嬉しそうにピアノの前に座った。

「ラヴェル。亡き王女のためのパヴァーヌ。」

「ラヴェルねえ。」

「そ、こつちもポピュラーなんだけどねえ。」

わざわざ視線をこつちに向けて微笑んでくるが、指は止まらない。

うつむいて瞼を閉じる。音だけが聞ければいい。

よく聞くとミスタッチが目立つし、楽譜もあまり見ていないのが分かった。

でも。

一体なんだろう、この感じは。包み込まれるみたいなの、眠たくなるような。どうしてこんなに安心するのか。

目元が意味もなく熱くなつて、思わず唇をかんだ。感動？こんな下手な演奏に？ありえない。いつのまにか組み合わせていた手の甲に爪が突き刺さつてちくりと痛んだ。

目から涙が引いていって、音も止まった。私は顔を上げて時計を確認する。七時。

私は口を開いた。

「まず言わせてもらおう。下手くそ。」

「知ってるよ、そのくらい。」

「ミスタッチ多すぎ、特に右手。」

「知ってる。」

「亡き王女のパヴァーヌを優しい感情たっぷりに弾いてどうするの。」

「どうもしないよ。」

「なんでこんな曲で指まわんないの。」

「下手くそなの。」

悪びれた様子もなくまたへらへら笑う様子に無性に腹が立った。

「…これが課題曲の、あのコンクール出ようとしてるの。」

まさかとは思いつながらも最後に聞くと、彼女は元気にうなずいた。

「あんたなんか出てても、努力賞すら取れない。出る意味ないよ。」

「うん、分かってる。でもね、神崎さん。」

小さく首を傾げる。

「たとえ金賞がとれたって、そこに何の意味があるわけ。」

顔こそ優しいままだったが、声は驚くほど冷たかった。言い返そうとした唇が固まって、その間に彼女は吐き捨てた。

「私が弾きたいのは、自分のピアノ。コンクールウケする神崎奏、つまりあなたのような真面目な型にはまりきった華のないつまらない演奏をする気はないの。」

口が咄嗟に出なかった。

「なあんて、ジェラシーだよね。」

彼女の顔がまた元に戻った。

「明日も来るからね、いやなら神崎さんは来なくていいよ。」

窓に足をかけて、こつちを振りむいた彼女の「土田音楽」と書かれた名札が沈みかけの夕日に反射してキラリと光った。

「奏、あなたまたどこ行ってたのッ。」

母のヒステリックな声が飛んだ。私は黙ったまま靴を脱いで丁寧に並べる。

「せっかくお忙しいのに来てくださってるのに！いい加減にしなさいよ！」

「別に頼んでないし。」

「私が頼んでるの！あなたには期待できるほどの才能があるの、だから

将来はピアノリストに。」

「才能？何それ、こんなにつまらない演奏のどこが？」

母が息を吸いこむのが分かった。

「そんなこと誰に言われたのよッ、あんたの思いこみでしょうがッ。」

「土田音楽とかいう生意気な奴。」

「はあ？あの子の方がよっぽど真面目な演奏よ？最近は何コンクール出ないみたいだけどね。」

母はいやそうに顔をしかめてドアの中に入っていった。

私はベッドに倒れこんだ。どうして母が土田音楽を知っているのだろう。真面目な演奏ってどういうこと？

スマホにつちだおとは、と呟くと、検索結果に「土田音楽 事故」と出てきた。

とりあえずそれを押すと、あらわれた記事はこんな見出しだった。

「現代の神童、土田音楽さん交通事故 右手を負傷し復活は絶望的か」
手が震えていた。あの子はそんなすごい子だったのか。そして右手。あの子のちっとも回らなかった、下手くそだった右手のタッチは。

画面を下にスクロールすると、ピアノの前に座ったドレス姿の土田音楽の動画があった。震えの止まらない指で再生ボタンを押す。

演奏が始まった。さっき音楽室で聞いたのと似ても似つかないものだった。

「私の…ピアノ。」

思わずひとりごちるほどに、それは私の演奏そっくりだった。

「今日も来たんだ。」

後ろから聞こえた声に振り向くと、土田音楽が窓枠の上に腰かけていた。

「昨日はあんなこと言っでごめんね、何回も言うけど、ただのねたみだった。」

「違う。」

彼女は驚いたようにこつちを見た。

「ねたんてるのは私。」

「…なんで。」

土田音楽は右手の上に左手を重ねた。

「前ならともかく、事故のせいで私はあなたの言うとおり『下手くそ』になった。そんな私が神崎さんに嫉妬される理由なんじゃないよ。」

「…私は土田…さんの前のピアノよりこつちの方が好きだけど。」

「それは、なぐさめかなにか？」

土田音楽の唇の端がぐにやりと歪んだ。

「昨日あんなこと言っちゃって、私が事故にあっちゃったなんて知っちゃって、申し訳ないんでしょ？罪悪感からなんでしょ？本当は前の方がずっと。」

「本当に、今のあなたの演奏が好き。」

「え？」

「前のピアノは私みたいに死んでる。でも、でもね土田さん、今は生きてて、ほっとする。」

彼女は黙りこんだ。窓枠に乗ったまま、ずっと私の目を見ていた。

「シヨパン、バラード第一番ト短調、作品。」

土田音楽は呟いた。

「私の一番好きな曲。もう今の私じゃ弾けない曲。神崎さん。」

彼女は再び黙りこくった。ピアノに向きななおった私が演奏している間も、ただの一言ももらさなかった。

最後の音を押しした。振りかえると、土田音楽のその大きな目から、ぼたりと一筋雫がたった。

「ありがとう。」

私はピアノのいすからおりて、彼女の前に立った。

「シヨパン、子犬のワルツ。」
ももごもごと言ったつもりだったが、さすがにこの距離では聞こえたらしくかった。

土田音葉は音楽室の床に降りたつと、弾き始めた。
やっぱり右手がもつれて、ワルツというよりじゃれ合いを表現してるみたいだった。だけどなぜだろう、微笑んでしまいそうな気持ちにさせられるのだ。

土田音葉は立ちあがってこっちを見た。つかつかと近よってきて、ちよつと迷ってから左手で私の左手をつかんだ。

「神崎さん、明日も来る？」
「もちろん。」

土田音葉は微笑した。

窓の外の空は、いつのまにか藍色になりかけていた。

